

「巣箱」

※おまけSS「巣箱」及び「薄氷」には作品、キャラクターに関するネタバレが多分に含まれています。本編視聴後の閲覧を推奨致します。

物心つく前から僕は一人だった。

何年も前から変わらないラインナップの児童文学書、子供同士で奪い合った末に背表紙から千切れセロテープで補修された絵本、太陽光で色褪せて屑がこちらから出ているボロボロの畳、埃臭くて湿気っていてぺっちゃんこの共用布団。

あれから二十年以上経った今でも、瞼を閉じるだけであの灰色がかった時間を鮮明に思い出せる。

僕が幼い頃から住んでいた児童養護施設では、僕と同じく親に見捨てられた子供が多かった。

施設にいる子供の全員が虐待、放置、捨て子、金銭難、ありとあらゆる不幸の末にそこに連れてこられた。

何故僕が児童養護施設にいたのかは分からない。少なからず言えることは、僕は僕の両親の名前も顔も知らないということ。

僕はそんな状況でも、他の子供達みたいに癪癪をあげたり、わがままを言ったりはしなかった。わがままを言ったところで、自分に利益は無いからだ。

キーキーと猿みたいに泣きわめく子供、共用の物を奪い合う子供、それをたしなめることなく静観している先生。

親を無くした子供というのは、往々にして情緒が不安定になる。自分を守ってくれる人間がいらないことがどれほど精神的にダメージを与えるのかは、体験したことのない人間には想像しがたいだろう。

僕はというと、そんな周りの姿を見ても正直何も感じていなかった。うるさい子とは物理的な距離を置けばいいだけだし、物も元々自分の物なんて一つもないのだから執着するこ

ともなかった。

先生のこと、自分の親代わりだと思ふ程好きにはなれなかったし、顔を見慣れたと思つたらいつの間にか退職していった人は多かった。

施設にいた時に感情を露わにした覚えが無いくらいには、僕は小さい頃から心が死んでいたのだろう。

生まれてから一度も幸せらしいものを味わつたことのないこの僕に、ある日奇跡が起きた。小学校に上がる前の秋頃、僕は裕福な家庭に引き取られたのだ。

地元の人なら一度は耳にしたことがあるであろう代々医師を輩出している名家「石流家」。その次男坊として迎え入れられることに決まつた。幼い頃の僕は、素行に問題なし、性格も大人しく、先生の言うことも素直に聞く。育てるにあたつては好条件だったのだろう。

地元では有名な大病院の院長を務めている石流家の御当主兼、この日を境に僕の父親になつた人は僕の頭を優しく撫でる。

「花鶏、今日からよろしくね」

あと、というのは僕が石流家に引き取られる際に付けられた名前だ。

花鶏はスズメ目アトリ科の鳥類の名前で、僕も写真でしか知らないがなかなか可愛い顔をしている鳥だ。ただ当時僕は「跡取り」の洒落で付けた名前じゃないのかと考えてしまったことは僕の心の内だけに秘めておこうと思う。（何故ならば跡取りは血の繋がらない兄がきちんと行うからである）

養子になるための手続きはつつがなく行われ、僕は流されるままに石流家の家族の一員：立派な息子となったのだった。

今まで名乗っていた名前である「竹千代」はその時に捨てられた。

新しくいい匂いのするふかふかの布団、施設の名前が油性マジックで書かれていないパーカー、シュリンクのかかった新品の本、僕専用のぬいぐるみ。

僕の望む物の大半は自動的に与えられた。

施設で暮らしていた時と打って変わって、何不自由ない暮らしとなった。

だが、僕は何故か心が苦しかった。せめて文句の一つでも言える家庭だったら良かったのに。僕は施設にいた時から何も変わらず、感情を表に出すことは無かった。

父親はとにかく忙しい人で日常的に顔を合わせる事が少なく、母親は母親であり子供と関わる事が苦手な人だったのか、たわいもない会話は数える程度しか無かった。が、両親共に僕に愛情を注がなかったわけではなく、ただ不器用な人だけというのは幼心にも伝わった。とはいえ。

（これだったら施設にいた時の方が余程人と話していたなあ）
そんな風に思った時もあったが、ほんの一時のことだ。

十歳ほど年の離れた兄は僕にとっても優しく接してくれた。

思春期に差し掛かった時に突然血の繋がらない弟ができるなんて親に反抗したっておかしくないくらいのことなのに、兄は僕のことを本当の弟のように可愛がってくれた。

勉強で分らないことがあったら教えてくれたり、夏には手を引いてプールに連れていくてくれたり、自分の分のお菓子を僕に分けてくれたり。

しかしその優しさは僕には無意味だった。

突然与えられた身に余る幸福ほど怖いものはない。強制給餌に等しい。僕の幸福をためて消化しておくための胃はあまり大きくはなかった。

九歳の頃には死んだ心の傷がすっかり露呈していた。

宿題を片付けていた僕は、手に取ったプリントで指を切ってしまった。少し痛かったが、大騒ぎするような傷でも無かったので止血もせずに血が出ている様子をぼんやりと眺めていた。

あろうことか僕はそこで気付いてしまったのだ。痛みに安心する自分に。

視界に入った赤色のボールペンを思わず手に取り、慌てて左手の手のひらに一本線を引く。赤い線。まるでカッターで切った傷口のような色だった。たまらずもう一本線を引く。

「……」

手に赤い線を引くことがどうして心安らぐのか、頭の中で疑問符が溢れる。リストカット、という言葉を知ったのは大分後のことだ。

その日を境に、僕は軽い自傷行為のような真似事を始めるようになった。自分以外誰もいない教室や自室で、密かにインクを無駄にする。

最初は手のひらに書くだけだったが、次第に手首、腕、二の腕に赤い線が引かれ、徐々にエスカレートしていった結果、太もも、ふくらはぎまで真つ赤な線で覆われることとなった。自分が何かの物事に執着するというのは初めての経験だったので少し戸惑ったものの、ポールペンの尖った部分で自分の体を刺すようになぞっていると頭の中がすっからかんになるほどとても気持ちが悪く落ち着いた。

と同時に、こんなことをしてはいけない、他人に見られてはいけない、という気持ちもあったので、気が済んだ後は線を手で擦って落としていた。

だが、そんなことをしては誰にもバレないまま続くこともなく。

いつものように宿題をしながら体に線を引いていたら突然ドアが開き、兄が僕に声をかけた。

「花鶏、宿題は順調か。母さんがケーキを買ってきたから一緒に……」
背後に兄が立つ。お互いにこわばる顔。

僕の体には隠しようもない程全身に書かれたおびただしい量の赤い線。
よりにもよって、兄に見つかってしまった。

突然のことだったため、逃げようにも体に書かれた線を消そうにも、心も体も硬直して動けなかった。

即座に、僕が持っていた赤ペンは兄に取り上げられた。

「これは筆記用具だ。自分を傷つけるためのものじゃない！」

いつも温和で優しい兄がいつになく声を荒げて僕に叱りつけた。

それまで兄は僕に怒ったことや声を荒げたことなど一度もなかった。だから、僕はそれがなんだかとてもおかしいものを見ている気がして。

「あは、あはは…」

乾いた笑いがこぼれる。これは、石流家に来て初めて感情を露わにした瞬間だった。

その後、兄はお湯で濡らしたタオルで僕の腕と脚を拭いてくれた。

「軽くミミズ腫れになっているじゃないか」

インクが綺麗に拭き取られミミズ腫れの部分に消毒した後、軟膏を塗られた。

「もう…するんじゃないよ」

兄にかけられた言葉に、僕は無言で頷くしかなかった。

（余談だが、二十年程経った今では手に持つものはボールペンからナイフになっていて、傷はより深くなり、タオルで拭いたくらいではどうにもならなくなっている）

兄に叱られた後は見つからないよう以前よりも慎重に隠れてやるようになったり、中学生になってからは受験のプレッシャーのせいもあってペンからカッターにチェンジしていたり、それもまた見つかってしまつて精神科に連れていかれて通院、服薬をするはめになったり。

幸せな家庭で不幸な子供をこつそり満喫していた。兄はといえば、就職した後美人な奥さんと結婚して一男に恵まれ、僕と違って華やかな人生を送っていて何とも羨ましい限りだった。

「僕、高校生なのにもう「叔父さん」になつちゃうのか……」

庭の木が色付き紅葉していた秋のことだ。僕に甥ができた。

「はは、そうだな」

赤子をあやしながら兄は言う。兄は父らしく頼もしい顔をしていて、それを見た僕は涙腺が少し緩んだ。幸せとはこういうことを指すのだろう。

「ねえ、この子の名前はなんて言うの？」

僕は鼻声を誤魔化すように言葉が続ける。

「燕、俺とお前と同じく鳥の名前から取った」

「燕くん、かあ……」

ツバメというと施設で読んだ「幸福な王子」を真っ先に思い浮かんだ。あれはどちらかというと手放しに喜べる終わり方のお話ではないのだからけれど、幼い頃の僕は何か夢中で読んでは自己犠牲心の塊の王子とツバメに共感していた。とっさに、漆の樹液を採取しているのかというほどズタズタになっている左腕を抑える。

腕の傷の痛みなどとうに慣れたはずなのに、どうしてかその時は酷く痛んだのだ。

（どうか僕みたいにならないように、幸せな人生を送りなよ、燕くん）

屈託無く笑う甥の柔らかな頬を見ながら、心の中で祈った。

時は過ぎ。オギャーと泣いてはオムツを濡らしていた赤ちゃんは立派な少年となった。

それも、とても口が達者な。

「なあ叔父さん」

燕くんは何ともなしに僕のことをそう呼ぶ。

この「叔父さん」という言葉に侮蔑的な意味を含めているのは馬鹿な僕でもよく分かる。

「あーもー、僕のことをおじさん呼ばわりするのやめてよー！まだ一応若いんですけど！せめて竹千代さんか先生って呼んでよー」

僕は燕くんの通う学校の保健室の先生でもあるので、先生と呼ばれた方が好都合でもある。

「そういうこと言っていると、外でお前が本名で名乗ってないことを父に言いつけるぞ」

「に、兄さんにそれを言うのだけは勘弁して……」

僕が未だに旧名である「竹千代」を捨てられずにいることを兄さんが知ったらどれだけ心を痛めてしまうのか想像に難くない。でも花鶏、なんて柄じゃないんだよね。キラキラネームで生きるにしては、もう歳を食いすぎているし。

このようにすっかり舐めきった態度を取られてしまっているが、甥との仲は至って良好だ。こうしてわざわざ僕と会話をしに定期的に保健室にやってくるんだもの。

「竹千代叔父さん、うちの父には逆らえないもんなあ？」

ニヤニヤしながら燕くんは言い、頬杖をつく。

「こ、この生意気ちゃんめー！君のお父さんになんか変わって叱ってやる！大人を舐めるんじゃないぞ！それに、僕は知ってるんだからな！君は隣の家に住んでる幼なじみちゃんのことか

好…うぐ！」

口も達者だが、口より先に手が出ることも多い燕くん。オーバーに痛いふりをしてやり過ぎす。燕くんが小柄で華奢なせいもあってか、全く痛くも痒くもないんだよね…。

「ふん、勝手に言ってる」

顔を真っ赤にして眉を釣り上げている燕くん。

あー僕知ってる、こういうのを今時ツンデレって言うんだよね？…違う？

「叔父さんは良いよな、なんかいつ見ても楽しそうにしてて」

「あはは、毎日がハッピーでエブリデイだよー」

僕は燕くんに向かって能天気な笑ってみせる。

「なんじゃそりゃ…」

燕くんは本気で呆れ返っているようだ。

僕のことを「自分の父の血の繋がらない弟」としか認識していない燕くんに全く非はない。どれだけ陰鬱な気持ちを抱えていようと、ニコニコとしてさえいれば簡単に人を騙せるというものだ。

肉体的な傷も、精神的な傷も、布一枚被せてしまえば誰にも、自分でさえも認識できなくなる。僕はそうやって今日も、自分の周りと自分に嘘をついて普通を生きている。

そんなことを思っていた矢先、燕くんに腕の傷のことがバレてしまったのだけれどそれはまた別のお話で。